

合研集会の討論をゆたかにすすめるために

第58回全国保育団体合同研究集会 基調報告(案)

「子どもの思い、おとなの願い 感じる、つながる、響き合う」

「子どもたちと一緒に安心して生きられる社会を」

常任実行委員会



はじめに — 保育情勢 —

いま保育の現場では、圧倒的な人手不足を背景に、子どものことについておとな同士がゆったりと話したり、思いをめぐらせる時間やゆとりが持てないという現状があります。子どもの生活や育ちを支える、おとな同士のつながりをつくることの難しさを多くの保育現場が感じています。

その一方、少子化の進行や、世帯所得格差の拡大など、子どもや保護者をとりまく状況が大きく変化する中で、保育や保育現場に求められる役割

はますます大きくなっています。こうした状況をうけて、政府は保育や子育てに関わる様々な政策を進めてきました。しかし、その政策は一人ひとりの子どもの育ちを支えるものになりきれていません。

例えば、こども誰でも通園制度（乳児等通園支援事業）です。この制度は、保育施設に通っていないゼロ～2歳児を対象に全国どこからでも1時間単位で保育園の利用申込ができます。試行事業を経て2026年4月から全自治体での実施がはじまりました。各自治体の事前調査ではその需要は高く、支援を必要とする家庭が多いことがわかります。しかし保育現場からは、職員配置の基準や出来高払いで収入が変動することなど、制度自体の不十分さが繰り返し指摘されています。さらに、保護者と保育園等の直接契約の制度であるこ

とから、公的責任の後退も心配されています。

デジタル化の推進も政府が力を入れている政策の一つです。いま、デジタル化推進を含む保育のデジタルトランスフォーメーション（DX）政策が、官民一体となって急速に進められています。DXはデジタル技術を活用した、保育現場の業務の効率化と改善を目的にしています。もともと経済界で用いられていた考え方ですが、現在ではそれが保育や教育政策にも色濃く反映されています。デジタル機器や生成AIは、便利に使えて助けになる場面もあります。だからこそ本来は、それが子どもの育ちにどう影響するのか、保育実践を深めることとどう関係しているか、議論を尽くすことが必要ですが、いまは議論が不十分のまま、政策だけがどんどん推進されています。

保育をめぐっては、他にも課題があります。過

疎地や人口減少地域では保育園の統廃合や多機能化が進められ、最低基準などの規制緩和も実施・検討されています。政府は保育の量の拡大（保育施設を増やす）は一定の成果をあげたとしていますが、都市部では隠れ待機児童も依然と多い状況です。定員割れの状況も、地域差はあるものの、ゼロ歳児で特に多く、保育園の運営に深刻な影響をあたえています。

また、最近では、地球温暖化による気候や生態系の変化などが、子どもたちのあそびや生活に影響をもたらしていることも大きな課題となっています。子どもたちの豊かな育ちを保障するためにはどんな保育制度や政策が必要なのでしょうか。子どもの姿や保育実践から考え合ひましょう。

もう一つ、今集会で考え合ひたいことは、「平和」についてです。

いま政府は日本国憲法の「改正」を進めようとしています。その議論の中に、憲法第九条の「改正」があります。

憲法第九条は、戦争を放棄すること、戦力を持たないこと、他国と戦争しないことを定めています。しかし政府は、平和は武力があつてこそ守ることができるとして、武力を持てるように、戦争ができるように、憲法第九条を変えようとしています。

世界では、戦争や紛争が絶えず、たくさんの子どもの命が奪われ、安心・安全に生きる権利が侵害され続けています。本場に、武力で平和はつくれるのでしょうか。子どもたちの生活や命は守られるのでしょうか。

子どもたちと一緒にだれもが安心して生きられる社会をつくるために、すべての子どもたちが生

きるよるこびを感じられる世界をつくるために、私たちにはいま何ができるでしょうか。みんなで考えてみませんか。

I 私たちの社会と 保育をとりまく状況

子育て世帯の現状

現在、多くの保育現場では、「子どもともっと丁寧に関わりたい」「保護者の話をゆっくり聞きたい」と感じながらも、そのための時間や余裕を持つことが難しくなっています。保育士不足や保育士の長時間労働の問題は以前から指摘されてきましたが、いま社会で起きている現象は、単に「業務が多い」「労働時間が長い」という問題ではありません。子どもを語り合ひ、保護者の悩みに耳を傾け、保育者同士が支え合ひながら実践をつくっていくための土台そのものが、失われつつあるのではないのでしょうか。

その背景には、子育て世帯を取り巻く社会の大きな変化があります。

現在、日本では共働き世帯が約72%と一般的になっています。かつては、子どもが小さいうちは「父親が働き、母親が家庭で子どもを見る」という家族像が社会の標準のように語られてきました。しかし現在、そのような形で生活できる家庭は決して多くありません。物価高の中、生活費の負担が増大し、特に都市部では、住宅費や教育費などの負担も加わるため、一人の収入だけで生活

を維持することは難しくなっています。

もちろん、女性が働き続けたいという希望そのものは大切なものです。しかし現在の共働き化は、単に「女性の社会進出が進んだ」という言葉だけでは説明できません。「働きたいから働く」というより、「働かなければ生活が成り立たない」という切実さを抱えながら働いている家庭も少なくないからです。

しかも、働き方そのものも大きく変化しています。長時間労働や不規則勤務などによって、家庭の中で子育てや家事を調整する余裕は小さくなっています。朝早く家を出て、夕方ぎりぎりに迎えに来る。仕事の都合で延長保育を利用せざるを得ない。休日も疲労が蓄積し、十分に休めない。そうした生活を続けている保護者も少なくありません。

さらに、地域とのつながりも弱くなっています。以前であれば、近所の人や親族との関わりの中で子育ての負担や悩みを共有できた場面もありました。しかし現在は、「誰にも相談できないまま子育てをしている」という保護者も増えていきます。そのため、保護者にとって保育園は、単に子どもを預かる場所ではなく、生活そのものを支える社会的インフラになっています。

朝、保育園に子どもを預けられるから仕事に行ける。延長保育があるから何とか働き続けられる。保育士に子どもの様子を聞けることで、不安が少し和らぐ。保育園は、子どもの育ちを支えるだけでなく、保護者が社会の中で生活を維持していくための重要な基盤にもなっています。

だからこそ、保護者が保育者との短いやりとりで救われる場面も少なくありません。お迎えの際

に保育者や他の保護者と交わされる何気ない言葉が、「ちゃんと見てもらえている」「一人ではない」と感じられる大切な支えになることがあります。特に、子育てに不安を抱えている保護者ほど、「否定せずに話を聞いてもらえること」に救われています。子育てには正解がありません。しかし現在の社会では、SNSも含めて、「ちゃんとできてるか」が常に関われやすく、保護者自身が強いプレッシャーを抱えています。だからこそ、本来、保育の現場には、「悩みを安心して話せる関係」が必要です。

しかし、その保育現場の側でも、余裕が失われつつあります。

保育が置かれている状況

長時間保育と保育者の労働負担

共働き世帯の増加に伴い、保育時間は長時間化してきました。朝早くから夜遅くまで子どもを受け入れる体制が求められ、保育者の勤務は細かいシフトに分かれています。その結果、職員全員が同じ時間にそろふことは難しくなりました。

さらに、保育者の仕事は、子どもと関わる時間だけではなく、記録、連絡帳、保護者対応、会議、行事準備、環境整備など、多くの業務が積み重なっています。しかも、それらの仕事は落ち着いて進められるとは限りません。書類を書いている、職員同士で話している、途中で子どもや保護者への対応が必要になる。保育の仕事は常に「中断され続ける労働」でもあります。

そのため、保育者は一つひとつの仕事を十分に整理しながら進めることが難しく、「目の前のことをなんとか回す」ことに追われやすくなります。

有給休暇が取りづらい職場も多く、慢性的な疲労感を抱えながら働いている保育者も少なくありません。

みんなで集まって子どものことを語り合えない現場―保育実践を支えるもの

こうした状況の中で最も削られていくのが、「ふり返る時間」です。「どうしてこのような姿が見られるのか」、「この関わり方でよかったのか」。保育の現場には、正解が一つに決まらない場面が数多くあります。

しかし現在の現場では、その「迷い」を安心して共有することが難しくなっています。会議を開こうとしても、シフトの違いによって全員が集まらないことがあります。非正規職員は勤務時間の制約から参加できない場合もあります。日中に話し合いの時間を取る余裕がなく、短い引き継ぎだけで一日が終わってしまうこともあります。本来であれば、「ちよつと気になる子どもの姿」についてゆつくり話し合いたいと思っても、その時間がありません。若手保育者が悩みを相談しなくても、周囲も忙しく、相談できないまま時間が過ぎてしまうこともあります。すると、保育者は次第に、「自分一人で判断しなければならぬ」という感覚を抱えるようになります。

もちろん、保育者一人ひとりの努力や責任感は非常に大切です。しかし、保育を個人の力量だけで支えようとすると、現場は疲弊していきます。

本来、保育やケアは、一人だけで担うことは難しく、チームで行う仕事だからです。子どもの姿を共有すること、迷いを語り合うこと、経験のある保育者から学ぶこと、自分では気づかなかった

子どもの姿を他の保育者から教えてもらうこと、こうした積み重ねによって、保育の実践は豊かになっていきます。

保育の質は、個々の保育者の能力だけで決まるものではありません。保育者同士が関わり合いながら実践を積み重ねていく「保育者集団」によって支えられているのです。

「一人で抱え込まずに保育できるか」を決めるもの

保育の質を守っていくための「保育者集団」をつくる上で、特に大きな課題となっているのが、人員配置に余裕がないことです。そういう意味で、現在の配置基準は不十分です。

たとえば、誰かが保護者対応をしている間に、他の保育者が保育に入れること、クラス会議が行われている時間に担任以外の保育者がクラスの子どもたちに対応できること、職員間の行き違いが起こつたり経験の浅い保育者が困つたりしたときにすぐ相談できる人がいること、保育現場にはそうした「余白」が必要です。

しかし現場では、その余白が非常に少なくなっています。国の配置基準、またはそれ以上に保育者を置けない保育現場では、フリーの保育者を配置できないため、突発的な欠勤が重なり配置基準を割り込む時間帯が生じ、ベテラン保育者の時間外勤務で穴埋めをするという事態になります。事務時間も子どもの午睡中の隙間を縫う「いつも臨機応変」な対応にとどまり、計画的に確保できない実態もあります。常にぎりぎりの人数で回しているため、誰かが休めば他の職員にしわ寄せがいく。会議の時間を取れば現場が回らない。結果

として、「子どもの声をじっくり聴く」ための余白がなく、「とにかく今日を乗り切る」ことが優先されるようになります。

配置とは、単に「子どもに対して保育士が何人必要か」という問題だけではありません。保育者が孤立せず、一人で抱え込まずに子どもや同僚とゆっくり関わりあえる条件があるかどうか、そうした問題でもあるのです。

保育者が働き続けられる保育現場に

また、現在の保育現場には、中堅層が定着しにくいという問題があります。保育者自身が子育て期に入ると、不規則勤務や長時間労働との両立が難しくなります。子どもの急な体調不良への対応、家庭との両立など、多くの負担を抱えながら働き続けることは容易ではありません。

子どもが就学前の時期は、延長保育をフル活用してどうにか仕事と子育てを両立するものの、子どもが小学校に進学した後の課題もあります。学童保育に子どもが通いたがらないケースや、不登校の問題に直面し、仕事と子どもの生活を両立することが難しくなる家庭も少なくありません。その結果、保育者の中にも離職したり、短時間勤務や非正規へ移行したりする人も少なくありません。つまり、豊かな経験を持つ保育者ほど、現場に残り続けることが難しいという状況が生まれているのです。

これは、個人の努力不足の問題ではありません。現在の社会における子育て環境と、保育労働のあり方そのものが、人生の変化と両立しにくい構造になっているのです。

そして、この問題は単に「働き続けられない」

というだけでは終わりません。経験の蓄積が断絶されることで、若手が学ぶ機会も失われていきます。「困ったときに相談できる人がいない」「子どもの見方を一緒に考えてくれる人がいない」という状況は、若手保育者の不安や離職にもつながります。

だからこそ、私たちは「人手不足」という言葉だけで現場を語るのではなく、「どのような保育を実現したいのか」という視点から、配置や労働条件を考えていく必要があります。

子どもの育ちを支えるためには、まず保育者自身が孤立しないことが必要です。そして、保育者が安心して悩みを語り合える環境こそが、豊かな保育実践の土台になります。

配置基準の改善は、単なる「人手不足対策」ではありません。それは、保育者が人生を通して保育を続けられる仕事にしていくための条件であり、子どもの育ちを社会全体で支えていくための基盤でもあります。

保育を守ることは、子どもだけを守ることでありません。保護者の生活を支え、保育者の人生を支え、社会そのものを支えることにつながっています。いま必要なのは、現場の努力だけに保育を支えさせるのではなく、「みんなで子どものことを語り合える保育」を、社会としてどう保障していくのかを、あらためて問い直していくことではないでしょうか。

Ⅱ 身体と心でつながる関係づくり ― 孤立しない保育・子育て

保護者と保育者のあいだで、
いま何が起きているのか

保育者と保護者は、子どもを介して出会い、その育ちを共に支えながら関係を育んでいきます。子どもが豊かな日常を過ごしてほしいという願いは、どちらにも共通しているのではないのでしょうか。しかし、その思いを語り合い、関係を十分に育むだけの「余裕」が失われつつあります。

人手不足や過密な業務、長時間労働などは、子どもの姿を聴き合い、共に考えるための時間や機会を奪い、関係を育んでいくことを難しくしています。しかし、その背景には時間の不足だけではなく、私たちの社会を覆う価値観の変化もあるように思います。

現代社会は、失敗を避け、効率的に、即座に正解を出し、結果をコントロールすることを求めています。「コスバ」や「タイパ」といった言葉の広がりにも、それは現れています。近年では、生成AIを活用した子育て相談も広がっています。時間や場所を選ばず相談できることは利点です。その一方で、いつでも答えにアクセスできる環境は、私たちを少しずつ「すぐに答えを得ること」に慣れさせてもいます。

本来、保育や子育ての「ままならなさ」はすぐに答えが出るものではありません。けれども、効

率化と即応性が加速する社会では、その「ままならなさ」は、誰かと共に抱える「問い」ではなく、すぐに何とかしなくてはならないという焦燥感を生み出しやすくします。その結果、立ちどまる間もなく、個人が抱える「問題」へと変わり、誰かと一緒に感じ合い、考える回路を細くさせてしまっているのではないのでしょうか。答えの出ない不安や戸惑いを抱えながら、その場に身を置き続けることは、以前にも増して難しくなっているように思います。

「ままならなさ」に出会うとき

保育や子育ての日常は、計算通りにいかない「ままならなさ」と出会うことの連続です。例えば、保育者であれば、子どもの思いを大切にしたいくてあそび時間を十分にとったけれど、片付けの時間になってもあそびが続いている。このままでいいのだろうか。散歩先から帰ろうと子どもに声をかけても応じてもらえず、時間だけが過ぎていく。どうしたらいいのだろう。保護者であれば、登園しようとして玄関まで来たのに、「イヤ」と泣き続ける。保育園からの帰り道、公園であそびたいと泣き叫ぶ。どうしよう。いずれも、子どもと向き合いますが、その「ままならなさ」に悩む場面です。

しかし、それと同時に私たちの身体も反応しています。子どもの「イヤ」という声を聞いた瞬間に胸がざわつき、その先のことを考えると肩に力も入ります。時計を見るたびに胃も重くなつて、気づけば息が詰まるような感覚で、子どもと向き合っているかもしれません。

こうした場面に会おうと、私たちは「どうしたらよいのだろう」と解決策を探そうとします。そ

れは自然なことです。しかし、そのことに精一杯になるあまり、自分の身体に何が起こっていたのかを見落としてしまうことがあります。胸がざわついていたり、肩に力が入っていたこと、息が詰まるような感覚を抱いていたこと。そうした身体の反応は、その場では気づかなくても、後から見えてくることがあります。

では、その身体感覚が誰かとのやりとりのなかで語られたり、共有されたりするとき、私たちの間で何が生まれてくるのでしょうか。

ひとりじゃないと感じるときは

どこからやってくる?

ある保育者の相談で、担任している子どもとの関わりがどうにもうまくいかないという話を聞いていました。私は質問を重ね、問題を整理しようとしていましたが、しつくりくる答えが見つかりません。すると園長が「それだけ悩みが深いよね、ずっと悩んでいたんだと思う」と伝えてくれました。その一言で、私は頭で理解しようとするあまり、その保育者の苦しさを身体で受け取るところを忘れていたのだと気づかされました。

また、保護者の話を聴く会で、ある親御さんが「何をしてもイヤと反抗する子どもに、どう接したらよいかわからない」と語りました。「いまはそういう時期」と頭で分かっているけど、イライラが募る。結局、甘いものをあげて、罪悪感を抱いてしまう。その話を聴きながら、私も肩がこわばっていました。他の親御さんが「わかるわかる!」と言いつつ、それぞれの切り抜け方を話します。すると、始めに語った親御さんの表情が少し緩み、「AIにも聞いてもらっていたけど、直接話せて

ほっとした」と答えていました。

私たちは頭で考え、言葉を交わし、解決しようとする。でも、「ここにいていいんだ」「悩みをここに置いていいんだ」という安心は、言葉による納得よりも先に、張り詰めた身体が少し緩むところから生まれることがあります。誰かに話を聴いてもらい、共に驚き、戸惑い、困り、喜ぶこと。そこには、言葉だけではない身体や心の動きの共有があります。

私たちは失敗しないこと、速く正しく応じることを求められるなかで、身体も心も反応しにくくなっています。必要なのは、まず頭で理解することよりも、身体で試し、戸惑い、うまくいかなさを感じ、それを誰かに聴いてもらい、応答されることではないのでしょうか。

「感じ合う」とは、意見の一致ではなく、互いに異なる感じ方を抱えながら、その場を身体ごと共にすることなのだと思います。悲しい、苦しい、困った、面白い―感じ方は一人ひとり異なります。それでも、そうした身体感覚を伴う経験は、私たちをどこかで響き合わせます。それがつながりを生み、「ひとりじゃない」と感じられるようになるのかもしれませんが。

小さな感じ合いからつながりを

忙しさや疲弊のなかで、新たに何かを付け加えることは簡単ではありません。だからこそ、「できていないこと」を数えることではなく、いままさに起きている小さなつながりや、感じ合いの瞬間に目を向けてみてはどうでしょうか。朝の短いやりとり、ふとした表情、声のトーン、つい笑いが起き、身体が弾む瞬間に目を向けると、私たち

はつながりを見つけ直していけるのかもしれない。

もちろん、感じ合いは、楽しいことや温かなやりとりのなかだけに生まれるものではありません。互いを十分に理解していなくても、「どうしよう」「困ったね」と、弱さや戸惑いを誰かと共有できることがあります。そうして身体が少し緩み、「ここにいていい」と感じながら、その場に居続けられる関係は、私たちを孤立から遠ざけてくれる大切なつながりです。その土台があつて、人はまだ見ぬ未来と一緒に想像できるのではないのでしょうか。合研から生まれた雑誌『ちいさいなかま』でも、保護者と園舎づくりを考えたり、地域の親子が集う場を少しずつ育てていく実践が紹介されています。そこでは「こうなつたらいいね」「やってみようか」と語りながら、人と人とのつながりが生まれていました。

すぐに答えを出そうとする前に、まずは今日、隣にいる人と「困ったね」と顔を見合わせてみる。そのとき、喉のつかえが少し緩む感覚が生まれるかもしれません。そうした小さな感じ合いを確かめ、つながりを見つけ直していきませんか。

子どもたちは、おとなたちが完璧に分かり合っている姿ではなく、おとな同士が、戸惑いや弱さを抱えながらも、笑い合い、支え合い、共に居続けようとする関係のなかで、いまを積み重ねています。

Ⅲ 問いと揺らぎを大切にしたい 保育・子育て

生活は判断の連続

一人の子どもとじっくりあそびたいと思つたとき、「見て！」と別の子どもが呼びに来る。帰宅前の急いでいる時間にかぎつて「もう一回」が止まる。え、どうしよう。もう一人自分がいれば……。待たなしの日常の中で、私たちは日々、判断を迫られます。

結果からふり返れば、ああすれば良かったという「正解」があるのかも知れません。でも、判断を迫られているそのときに、結果が見えているはずはありません。あのとき、もう少し子どもに付き合っていたら、「そんなこと言つて、いつも帰らないじゃない」なんて言葉をかけなければ、気持ちよく帰れたかもしれない。生活は、ときに後悔の念をはらみながら、つくられていきます。

A1時代に正解のない問いを抱える

検索すれば答えらしきものが見つかる時代です。生成AIに質問すれば、「それ、多くの人が悩んでいますね」と、励ましの言葉まで添えて答えてくれます。余裕がなくなると、答えが欲しくなるのは誰でも同じです。だからこそ、正解のない問いを抱え続けることが、以前にも増して大切になつているのかもしれない。

例えば、あの対応で良かったのか？ と帰り

道に思い出すあの時間。おそらく、私たちの心の中には、その場にいた子どもの表情や、自分や周囲のおとなたちとの関わりが思い出されていることでしょう。そういえば、担任の先生が「今日はとっても上手にお団子がつくれたんですよ」って言っていたな。ん？ つてことは、砂場からなかなか離れなかったのは、お団子が上手につくれるようになった姿を私に見てほしかったのかも知れない。

ふり返るなかで、そのときにはつかめなかった子どもの思いが見えてきます。ああ、もつと違った関わり方があったのかもしれない、という思いが生れてきます。でも、それでいいのだと思います。その日はうまくいかなかったても、子育てや保育には、また明日があります。

問いはすぐに解けるものではありません。でも、ふり返りの中で消えることなく私たちの中に残り、ふとした場面で顔を出し、次の判断を方向付けてくれます。

寄り添ってくれる仲間

保育の中で正解のない問いを抱えるとは、どういうことでしょうか。『ちいさいなかま』2026年2月号「わたしの保育実践ノート」では、ポツポツ第2保育園の井上みなみさんが、「勝ち負けではなく、つなぐことを選んだ子どもたち」として、リレーに取り組んだ実践を紹介しています。

涙を流して悔しがる様子や、勝ったチームに対して大きな声で喜ばないで欲しいという声に触れたとき、子どもたちにとって必要な感情なのだろうかと思ひます。そこで井上さんは、勝ち負けのない「つなぐリレー」（手を使わず不織布を体にあ

てて走る。その不織布がバトンとなって手渡しをする」というあそびを試みました。子どもたちが感じたことや不安に思ったことを丁寧に申し出さず、あそびが形づくられていきます。

しかし、それでもなお、保育者の迷いは消えません。どの子も楽しめ、体を動かすことに喜びを感じられるあそびは何なのか。結果としてうまくいったように見えても、もつと別の方法があったのではないかという思いが残ります。

それでも迷いは無駄になるものではありません。迷い続けることそのものが、子どもと共に学び続けようとする力にもなります。

経験としての保育を捉え直す

子育てや保育は、あらかじめ設定した目標への到達といった目にみえる形で捉えきれない営みです。一方で、箸が上手に使えるようになったり、自分で着替えができるようになることは、子どもにとつても喜びを伴うとても大切な経験です。

成果は、経験の外側から評価するためのものではなく、その経験の中で立ち現れてくる出来事として捉えたいと思います。例えば、つかまり立ちができるようになった子どもは、立てるようになったことを喜んでいてのでしょうか？ もちろん、できた！ という瞬間はあるでしょう。でもその次の瞬間、子どもたちはいままで見えなかった視界の広がり、驚き、喜びを感じているのではないのでしょうか。コマ回しだってそうです。新しい技ができるようになるということはうれしいことです。それが目標だとすれば、子どもたちができるようになったらコマ回しをやめてしまうのではないのでしょうか。できるようにするというこ

とはあくまでも通過点であり、子どもたちは面白いからあそぶのです。

何かができるようになる、ということは喜ばしいことではありませんが、それはあくまでも生活の流れの中で起きてくること。それだけを目指して関わりはじめると、目の前で起きている子どもの姿をかえって見落としてしまうこともあります。

子どもたちの経験は、何気ない日常の中で、人と人との関係や、身体、心の動きが重なりあう中で形成されています。そこでは「何ができるようになったか」ではなく、「どのような経験がその場に立ち上がっていたのか」が問われているのだと思います。

生活の意味を見出すために

こうした生活の中で子どもたちがつむいでいる経験は、一人の視点では十分に捉えきれないものはありません。あの時の子どもの「もう一回」という言葉の意味に気づかせてくれたのは、担任の保育者でした。こうした複数の眼差しを交わすことを通して、子どもの経験は見出され、編み直されていきます。

いままさに、目の前にある判断に寄り添うことはできないかもしれません。ただし、合研の場には、そのときのあなたに寄り添い、共にふり返る仲間がいます。ああ、もつとこうすれば良かったため息をつきたくなることもあります。でも、そのため息は、次の判断のためにとっておきましょう。

私の中にある仲間

自分の迷いや判断の後ろに、たくさんの仲間が



いるとわかると、人は安心します。保育者であっても、保護者であっても同じです。

保護者会の場で、同じ悩みを持つ者同士が話しあう。家庭の事情もそれぞれだし、子どもだって個性があります。ですから、同じことをしてもうまくいくとは限りません。でも、そこには一緒に考えてくれた仲間がいます。

子どもだって同じです。子どもたちは生活の中で、たくさんの迷いに向きあっています。その迷いを仲間と一緒に考えることは、たとえ「正解」を得られなかったとしても、子どもたちの力になります。

見えない仲間があなたのそばについてくれます。ああ、この場面、まさに合研の分科会で話題になっていたあのあそびが使えるかも。そのとき、あなたの判断の後ろには、たくさんの仲間がいるということを忘れないでください。

そしたら次は、ぜひ、一言でもよいので合研の場で仲間と共有してみてください。すると、同じように困っていた人の力になるかもしれません。そうやって、あなたの存在は、この場に集う仲間たちの一部になります。

Ⅳ 平和な世界をつくるために ―保育園の豊かな役割

「戦争はイヤ!」

戦争は遠い世界のことではありません。私たちの日々の暮らしのすぐそばで戦争が続けられています。多くの人々が、子どもたちが、何年間も、理不尽に殺され傷つけられている事実を見ないでいることはできません。

「戦争はイヤ!」、そして、「戦争はダメ!」――ほとんどの人はそう感じているのではないでしょう。か。米、イスラエル両政権がはじめた無法なイラン攻撃に反対する日本国民は圧倒的多数です。世界中でこの戦争への非難が高まり、米、国でさえ、トランプ政権のイラン攻撃を支持する国民は少数です。

戦争を止める出発点には、「戦争はイヤ!」という心からの思い、感情がすわっています。その気持ちを多くの人が声に出し、伝え合う場から戦争を止める力が育つてゆきます。

だから、戦争をはじめようとする者は、必ず、私たちが普通に持っている「戦争はイヤ!」という感情を殺そうとします。戦争で傷つき殺されるたくさんの人たちがいることを忘れさせ、他人事に感じさせるしくみを考え、雰囲気を広げるのです。例えば、戦場から何キロも離れた場所から、「敵を殺せ」とAI兵器に気軽に指示できるように。

戦争のこわさは、人の心と身体、いのちを壊す

ことだけではありません。壊してかわらないモノのように人間を扱っても平気でいられる――そんな感覚を当たり前にしてしまうのです。家族もろとも「敵」を殺す攻撃を「斬首作戦」と名づけ、「成功」すれば「勝利だ」と喜ぶ。そうやって殺す側にいる人間の心も壊してゆく。それが戦争です。

「戦争はイヤ!」、そう感じる心が殺されかけてはいませんか?

「いけないとは思いますが、じっくり考えるゆとりがない」……その通りだと思います。では、そんな毎日の中で、どうしたら、大切にしたい気持ちをすり減らさずに生きられるでしょうか?

子どもだって「戦争はダメ」とわかる

子どもだって、「戦争はイヤ!」と感じ、「戦争はダメ!」とわかります。わかるようになります。直接に戦争を体験していなくてもなぜ「わかる」なんて言えるのか?

身体と心に平和な暮らしをしつかりと染みこませているからです。うれしい、楽しい、ほっとする……そういう日々があるからこそ、それを壊す戦争はこわい、イヤと感じることができます。安心して過ごせる場があることは、「戦争はダメ!」とわかるために欠かせない土台です。

「イヤ」ってどういうことか気づかなければ、「戦争はイヤ」と言えません。つらい、苦しい、こわい……たとえ言葉でそう言えなくても、そんな気持ちがあることに気づく、こわい目に遭いたくないから「やっちゃダメ」とわかる。そうやって、子どもたちはイヤなことに気づき、ダメなことをダメとわかっていきます。自分の気持ちのことだけではありません。他の子がつらいだろうな、イヤ

だろうなと想像すること、一緒に苦しむことができる……きてしまうのです。

保育現場では、きっと、子どもの気持ちがそんなふうになっていく姿が見つけられるのではないのでしょうか。「イヤ」と感じ、「ダメ」とわかる心の土壌を耕すことは、「戦争はイヤ!」「戦争はダメ!」につながってゆく土台です。何がイヤでダメか感じ合ひ、わかり合える子どもたちの力を私たちはどのように伸ばしているのでしょうか?

「イヤなことはイヤ」と誰もが言える社会が大切だ

イヤなことを「イヤ」、ダメなことを「ダメ」と言えないとどうなるのでしょうか?

外に出せない気持ちは心の中に溜まって、いつの間にか自分を傷つけます。不安を押しつぶし、こわさを押し殺しながらがまんし続けると、あきらめるのが当たり前になります。イヤと感じることを表に出せない社会、ダメと思うことを訴えられない社会は、「言ってもムダ」というあきらめを、おとなの、子どもの心に植えつけてゆくのです。

イヤなことはイヤと言えらるんだよ! 保育園では子どもたちにそう伝えていくはず。自由のびのび気持ちを伝え合える社会でなければ、人は安心して平和に生きられないからです。成長するにつれ、「別に」とか「大丈夫です」と子どもが内心を隠さないといけない社会では困るのです。

戦争についてもまったく同じです。「戦争なんかしたくない」「平和に暮らすのがいい」、そう感じる誰もが、もちろん子どもだって、いつでも、どこでも、それを口に出し、伝えられる社会でなければおかしいし、危険です。

では、「戦争はイヤ」、「戦争を止めて」と訴えられる場を、機会を、私たちの社会はどれだけ持っているでしょうか？ おとも子どもも、自分たちの気持ちを気軽に伝え合えるつながりはどれだけあるでしょうか？

戦争に勝てないと平和にならない？

「戦争はイヤ」は感情論、通用しない、武力で勝てないと攻撃されるだけじゃないか―これは、「戦争はイヤ!」と声をあげるのをためらわせる強力な反論です。でも、武力で相手より強くないと本当にダメなんでしょうか？ 平和に暮らすためには戦争に勝てる力、軍備が不可欠なんのでしょうか？ たくさんの戦争が教える事実はどうでしょうか？

戦争は私たちの暮らしを守るどころか壊します。人の身体を心を壊し、命を奪います。戦争に勝たなければ平和にならないと考えるのは事実に反します。戦争は終わりのない軍拡競争を生み、戦争を止めるために人間の知恵が生み出したしくみ、ルールを破壊します。ついには、AI兵器によって人間社会が滅びてしまうことさえ予想されはじめました。

冷静に考えれば、戦争で戦争を止められるはずがないのです。戦争を止め平和な世界をつくるためには別の方法を考えるしかありません。強大な武力を持ち、戦争を始められる権力者だけが戦争を止められると思うのは大きなまちがいです。

権力を持たず暴力に頼ってものごとを「解決」する力もその気持ちも持たない私たちは、では、どんなやり方で戦争を止められるのでしょうか？

声を重ね合い、平和をつくる行動を広げよう

「戦争はイヤ!」と感じるのは私一人じゃない。平和な暮らしを続けたいと願うのも一人じゃない。そう思っているたくさんの人たちの声を、おとも子どもも、地域を超え、国籍を超え、文化を超えて重ね合わせることができたなら、戦争を押しとどめる巨大な心の壁が生まれるはずですよ。

戦争に向かう社会は、私たちがそれと気づかぬ間に、「戦争の種」を植えていきました。多くの民間製品が殺傷兵器に利用され、社会を支える医療や輸送分野などで働く人々を戦争に動員するしくみがつくられるように、戦争する準備が社会生活のいたるところに入りこんでくるのです。

だからこそ、一人ひとりが、自分にできそうな、「戦争をしない・させない」行動を起こすチャンスも広がっています。「平和な世界をつくるために役立つことは何だろう」という目で自分たちの生活をながめ、気づくこともたくさんあるはずですよ。

一人ひとりの声や動きは小さいかもしれませんが、けれど、それをつなぎ合わせることは必ずできます。小さくてもいい。声を出せば、動き出せば、そこから、戦争を止める広くて強い網の目が世界全体に広がってゆくのだと思います。

保育園という小さな社会は、平和の種が育つ豊かな土壌を毎日耕すことができる場です。平和に生きる権利を保障することは、「よい保育」がめざす大切な目標ではないでしょうか。どうすればその目標を実現していけるか。戦争の危機が広がっているいま、非核神戸方式を生み出した神戸の地で開かれる合研集会で、誰も被害者にさせず、加害者にもさせない平和な世界実現への道について一緒に

に考え合っていきましょう。

V 感じる、つながる、響き合う合研に

全国保育園団体合同研究集会は1969年に「平和な社会で子どもたちを育てたい、よりよい子育て、保育がしたい」というおとなたちの願いからはじまりました。全国から保育実践や子育ての悩みを持ち寄り、だれもが対等平等な立場で討論に参加することで、みんなで明日の保育・子育てをきり拓く学びや交流を重ねてきました。

今年の第58回集会は阪神淡路大震災を経験した兵庫県で3回目の開催になります。忙しい日々だからこそ、今集会では、ここに集った仲間と、ちよつと立ちどまって、子どもの思いやおとなの願いを話し合ったり、聴き合ったりしてみましよう。

悩みながら、迷いながら保育・子育てをしている人は、きつとあなたただけではありません。うまくできることは、一人のものに終わる。でも、うまく迷えることは、みんなのものになる。

集会参加のみなさん、今集会を、それぞれの悩みや迷い、願いを持ち寄り、明日の保育、子育てを語り合う場にしましょう。